

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370227

研究課題名(和文) 東北諸藩における軍記の享受と伝承・歴史認識形成の関連性を解明する新研究

研究課題名(英文) New study on the hidden impact of GUNKI acceptance on the forming process of the tradition / history recognition in clans in Tohoku area

研究代表者

志立 正知 (SHIDACHI, MASATOMO)

秋田大学・教育文化学部・教授

研究者番号：70248722

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：佐竹氏、南部氏、津軽氏に関わる系譜言説・歴史認識形成に関する調査研究を行なった。こうした言説が、寛永～寛文期に林羅山・鷲峯によって主導された幕府による「知の再編」に触発されて形成されたことを明らかにした。秋田藩の義家伝承の元となった縁起が古浄瑠璃に依拠して創作されたものであること、南部藩や津軽藩の系譜言説が、『吾妻鏡』のような史書に加えて、『太平記』のような軍記、あるいは他家の系譜言説などを参照しながら創作されていることなどを、具体的に解明した。また、その背景には他者(幕府・他大名・同族内部・家臣等)に対して自らの正統性を主張しようとする意図があることなどを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The thorough research on the process to form the genealogy tradition / history recognition in three families (Satake, Nambu and Tsugaru) revealed that such discourses were formed being inspired by the Shogunate project “restructuring of intellectuals” led by HAYASHI RAZAN and his son GAHO in Kan'ei and Kanbun eras. It was explained with specific examples that the ENGI, from which Yoshiie tradition was generated in Akita clan, was “created” based on Old Joruri, and that the genealogy of Nambu clan and Tsugaru clan was “created” based on history book like “Azumakagami”, GUNKI like “Taiheiki”, and other families’ genealogy, etc. In addition, it was also shown that each family must have some background intention to claim its own legitimacy

研究分野：人文学

キーワード：軍記 歴史認識 地誌 系譜言説

1. 研究開始当初の背景

地域伝承は、柳田国男が注目して以来、もっぱら「常民」たちの中の「歴史的事件の記憶」として、民俗学の視点から研究が進められる一方で、実証性を重視する歴史学の側からは、ほとんど顧みられることがなかった。こうした常識に対して、伝承の成立・流布の背後に、近世領主や文化人の関与があったことを明らかにしたのが、錦仁『浮遊する小野小町』(笠間書院, 2001.5)である。また、伝承研究の重要な資料とされてきた地誌成立の背景に、近世領主の領国支配の戦略があることを指摘したのが白石哲哉『日本近世地誌編纂史研究』(思文閣出版, 2004.2)であった。伝承に、領主や文化人たちが知識に基づいて植え付けた土地の記憶という側面があり、それを領国支配の戦略的思惑をもって記録したのが地誌であるという可能性が、両者の研究によって浮び上がってきたのである。

拙著『歴史を創った秋田藩』(笠間書院, 2009)では、秋田県に広く分布する八幡太郎義家伝承について、文献資料によって伝承の形成・流布・変貌の過程を明らかにし、資料成立の歴史的背景を検証し、伝承形成と歴史認識形成との双方向的な関係を、藩の領国支配の問題との関連の中で解き明かした。こうした活動の基盤となっているのが、17世紀における軍記享受と、これにもとづく知の再編であった。

この検証・考察作業の中で明らかとなったのが、領主家の系譜認識に関する言説と伝承との密接な関係性であった。課題は、この問題が地域でも認められるのか、これに類する伝承と歴史認識形成についてのモデルが想定しうるのかという点にある。そのために、まずは佐竹氏に加えて、と隣接する地域ありながらも、頼朝に由来する鎌倉期入部の伝承を伝える南部氏、歴史学的には南部氏の庶流と見られながらも、近衛家庶流を主張する津軽氏の歴史認識の成立過程とその背景の解明を当面の目標とする。

2. 研究の目的

中世軍記が近世社会に与えた影響の一端として、地域伝承形成や、その地域における歴史認識形成との密接な関連性を明らかにする。武家の家伝と結びついた軍記が領主の自己認識言説の形成に少なからぬ影響を与えてきていることは、近年の鈴木彰による薩摩島津家に関する研究等でも指摘される点であるが、近世諸地域にあっては領主家の自己認識が地域の伝承や歴史認識形成に深く関わっている。拙著『歴史を創った秋田藩』では、秋田における義家伝承形成に、義家の流れを汲む佐竹家が深く関与していること、背後に領国支配の戦略が潜んでいることを明らかにした。本研究ではこれを発展させ、地域における地誌や縁起類などの伝承資料、系図などの資料の調査によって、普遍的

なものとしての軍記と伝承・歴史認識形成のメカニズムを解明する

3. 研究の方法

対象地域(秋田藩・弘前藩・南部藩)の公立図書館を中心に、収蔵されている地誌・縁起書・和歌詞書などの地域伝承や領主家の系譜言説に関する文献資料調査を網羅的に行なった。資料の分析を通して、中世軍記やそこから派生した文学作品類からの影響関係の検証、領主家の系譜言説形成の年代を推定、それぞれの言説が生み出される社会的、政治的背景などについての考察を行い、対象地域ごとに伝承形成と歴史認識形成との関係性、領国支配政策などとの関連性に関するモデルの構築を試みる。

なお、関連する研究課題を掲げる研究グループとの積極的な交流をおこない、より幅広い視野と多角的な視点による研究の進展を図った。

4. 研究成果

年度ごとの研究成果は以下の通りである。

【平成 26 年度】

地域伝承の形成、地域における歴史認識形成の問題を総合的に捉えるための基礎的作業として、秋田県立図書館・秋田公文書館・弘前市立図書館の資料調査を行なった。また、当初計画には含まれていなかったが、調査の過程で秋田の義家伝承との関わりの深さが明らかになった山形庄内地方についても、光丘文庫(酒田市)、致道博物館(鶴岡市)、鶴岡市立図書館の資料調査を、関連性のある他の科研グループと合同で実施した。

また、地誌や領主の自己認識形成と密接に関連することから、大名文化圏、和歌活動を対象とした他の科研グループ(「松代・一関・南部藩・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏」(課題番号: 25370223-03、研究代表者: 平林香織)、「東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究」(課題番号: 26370229-01、研究代表者: 錦仁)と共同で、シンポジウム「藩主の交遊」(26年7月26・27日、致道博物館(鶴岡市))を開催、俳諧を媒とした藩主たちの交遊の様子、大名文化圏における和歌の意義などについて研究を深めた。

本研究において中心的資料となる各藩における地誌編纂の問題については、藩撰地誌の嚆矢とされる『会津風土記』の成立背景と編纂方法を軸として、これが幕府の命による国絵図制作、寛文印知改めに伴う郷帳整備や、『寛永諸家系図伝』の編纂、『本朝編年録』『本朝通鑑』などの修史活動、さらには林鷲峯による『奥羽軍志』刊行に象徴される源氏義家流を軸とした秩序意識形成の問題との関連性に注目した基礎的な考察を試みた。その成果については、伝承文学研究会平成 26 年度大会のシンポジウム「合戦物語の中世・近世」

(26年9月5日、青山学院大学)で報告、またその一端を『文学』(第16巻・第2号、岩波書店)に掲載した。

【平成27年度】

秋田県立図書館・秋田公文書館所蔵の佐竹氏関係資料の調査を継続するほか、「松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成の新研究」(基盤研究(C),課題番号:25370223,研究代表者:平林香織)と合同で、もりおか歴史文化館・八戸市立図書館の資料調査を実施、ミニ・シンポジウム歴史・和歌・俳諧から考える南部藩文化活動の可能性を開催、大名文化圏形成における大名の自己認識の問題や、資料としての地誌の有効性などを確認した。

その一方で、26年度に収集した弘前市立図書館所蔵の津軽氏関係資料(『可足権僧正筆記』、『津軽御系図』、『東日流由来記』等)の翻字を進める傍ら、佐竹氏・津軽氏・南部氏の地誌・藩史関係資料の比較研究を行なった。その結果、昨年度報告した地誌・歴史認識形成における幕府による「知の再編」の影響を、資料の成立年代との関係においてあらためて確認している。また、南部氏関連資料に見られる歴史認識の問題(糠部入部を奥州合戦の功績に基づく頼朝からの恩賞の結果とする等。歴史学研究者からは史実との齟齬が指摘されている)についても、『寛永諸家系図伝』に対応した系譜編纂活動との関連性が見えてきた。

【平成28年度】

最終年度にあたり、これまでに収集した資料の整理・分析を中心に研究を進めるとともに、弘前市立図書館資料の追加調査を行なった。

考察は、主として南部氏と津軽氏の系譜言説形成について行なった。その成果は、それぞれ、「北奥羽諸大名の系譜言説形成」(中世戦記研究会、東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター、2017年1月7日)、「家伝」という神話 津軽藩系譜言説形成の背景を中心に、「歴史の文体」研究会、学習院大学、2017年3月27日)において発表している。その概要は【まとめ】の に記載した。

【まとめ】

3年間の研究を通して、およそ以下のことが明らかになった。

幕府による「知の再編」との関連

地誌の編纂や大名家による系譜言説の整備が、林家(林羅山、鷲峯)に主導された一連の動き(『寛永諸家系図伝』(寛永20年)、『正保国絵図』(正保元年,完成は慶安4年)、『本朝編年録・本朝通鑑』(正保元年~寛文10年)、『奥羽軍志』(林鷲峯,寛文元年刊)、寛文印知(寛文4年)等)は、幕府による「知

の再編」ともいべき活動であり、諸藩における系譜言説や地誌の編纂と密接な関係があることが明らかになった。

『寛永諸家系図伝』の編纂に端を発した義家流を軸とした家柄秩序の確立の動きは、出版文化の面では、林鷲峯による『奥羽軍志』の刊行から万延~延宝年間における古浄瑠璃「義家物」の流行へと展開、その一方で、系図の提出は諸大名家における系譜言説の整備・編纂活動へとつながっていく。南部藩や津軽藩における系譜言説編纂の活動も、『寛永諸家系図伝』を契機に、寛文・延宝期に活発化していく様子が確認された。

他方、『正保国絵図』『本朝編年録・本朝通鑑』、寛文印知と地誌編纂の指示へと展開していく。他方『会津風土記』を嚆矢とする近世地誌編纂の動きへと広がっていくことが確認された。

秋田における義家伝承について

伝承の出発点となった『御領分神社仏閣縁起』は、基本的なストーリーの結構や一部本文が古浄瑠璃『八幡太郎義家 あべのさだとうたいちのこと』に近似していること、古浄瑠璃の「義家もの」流行は、『寛永諸家系図伝』編纂や『奥羽軍志』刊行などを背景としていると思われること、同様の伝承が庄内藩にも広がっていること等が、明らかになった。庄内藩の伝承も古浄瑠璃から派生していると思われることを考えるならば、『御領分神社仏閣縁起』も、その影響下に寛文年間以降に成立したことがほぼ確実であることが明らかになった。

南部氏の系譜言説につて

南部氏の系譜言説は、『寛永諸家系図伝』を始発とし、『信直記』『南部根元記』等によって確立されていく。歴史学研究の立場からは、南北朝期に南部氏の主流であったのは根城南部氏であるにもかかわらず、いつの頃か三戸南部氏がこれにとって代ったため、近世の系譜言説ではあたかも三戸南部氏が嫡流であるかの如くに記事が改編されていると指摘されている。その系譜言説が、鎌倉期については『尊卑分脈』に『吾妻鏡』の記事を接合し、さらに流布本系統の『太平記』の記事などを撰取することによって作られている可能性が高いことを明らかにした。陸奥国糠部入部の時期を、史実に反して鎌倉初期、奥州合戦の軍功に対する頼朝からの恩賞によるとするものも、鎌倉末期~南北朝期に奥州で活発に活動していた根城南部氏に先駆けての入部とい 歴史 を創ろうとしたからではなかったか。なお、こうした系譜言説の形成は、南部氏以外についても行なわれている可能性が高く、軍記研究等で登場人物の系譜を論ずる際に、近世以降の系譜資料を用いることの危険性を考慮する必要がある。

津軽氏の系譜言説について

津軽氏は、歴史学の立場からは南部の庶流という見方がほぼ通説となっているが、その系譜言説は、自らをいかに近衛家に接近させるかということに腐心している。『寛永諸家系図伝』では、津軽氏の祖とされる政信は、「家伝曰為近衛殿後法成寺尚通之猶子故称藤原氏未詳其实父」と近衛尚通の猶子となった故に藤原姓とされる一方で、「未詳其实父」というきわめて特異な記事を有する。津軽藩内部では、重臣高屋氏のような政信を南部右京の裔と主張がある一方で、4代藩主信政の弟可足の手による『可足権僧正筆記』では、曩祖を藤原秀衡の架空の弟秀栄に求め、途中近衛家から追放された姫君の流れを取込みながら政信に至るといふ、独自の系譜を主張する。『東日流由來記』などはこれをさらに拡大している。こうした言説には、金売吉次についての在り地他、『吾妻鏡』や南部氏・安藤氏関係の系譜言説なども取り込まれていることを明らかにした。なお、発表の席では、この時期津軽藩の家老が山鹿素行の弟子であることから、素行などの思想が影響している可能性の指摘があった。

以上、佐竹・南部・津軽氏の自己認識に関わる言説について検討を進めてきた。そのいずれの場合でも、史実を離れて始祖言説を歴史として創造していること、その背景には、他者（幕府・他領主・同族内部・家臣等）に対する正統性の主張という意識がうかがえた。ただし、その相手はそれぞれの藩の抱える事情によって異なることなども明らかになってきた。

その一方で、当初予定していた地誌類の分析を通して、領内における歴史認識形成を探るといふ部分に関しては、十分な検討を行なうに至っていない。この部分に関しては、平成29～33年度に取り組む新たな研究「地誌から見た東北諸藩における領国認識の形成過程に関する新研究」(17K02442)に引き継ぎ、継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

- 志立正知, 近世地誌に見る いくさの記憶, 文学(招待論文), 16-2, 2015, 167-180
- 志立正知, 藩撰地誌における和歌関連資料の摂取 観念的空間の創出「東北諸藩の和歌活動と歌枕・地誌との関係を解明する新研究 地誌と和歌・名所・歌枕」(科研費報告書, 査読なし), 2014, 83-91

〔学会発表〕(計 4件)

志立正知, 家伝 という神話 津軽藩系譜言説形成の背景を中心に 「歴史の文体」研究会、学習院大学, 2017年3月27

日

志立正知, 北奥羽諸大名の系譜言説形成, 中世戦記研究会、東京工業大学キャンパス・イノベーションセンター, 2017年1月7日

志立正知, 東北諸藩の歴史認識, ミニ・シンポジウム歴史・和歌・俳諧から考える南部藩の文化活動研究の可能性, 八戸市新八戸温泉和室, 2015年9月2日

志立正知, 近世地誌に見る軍記享受の側面, 伝承文学研究会, 青山学院大学, 2014年9月5日

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志立 正知 (SHIDACHI, Masatomo)
秋田大学・教育文化学部・教授
研究者番号: 70248722

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()